金融機構の理論

山口重克著

金融機構の理論

山口重克著

東京大学出版会

著者略歴

1932年　福井県武生市に生れる.
1955年　東京大学経済学部卒業.
1962年　東京大学大学院社会科学研究科修了.
現　在　東京大学経済学部教授.

主要著書

「資本論研究」第Ⅳ巻（宇野弘蔵編）筑摩書房，1968.
「資本論研究入門」（共編）東京大学出版会，1976.
「資本論を学ぶ」Ⅰ～Ⅴ（共編）有斐閣，1977.
「経済原論」（共著）世界書院，1979.
「競争と商業資本」岩波書店，1983.
「現代金融の理論と構造」（共著）東洋経済新報社，1983.
「資本論の読み方―宇野弘蔵に学ぶ」有斐閣，1983.

金融機構の理論

1984年2月20日　初　版

［検印廃止］

著　者　山口重克（やまぐち しげかつ）©

発行所　財団法人　東京大学出版会
代表者　江村　稔
113 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内
電話（811）8814・振替東京 6-59964

印刷所　大日本法令印刷株式会社
製本所　矢嶋製本株式会社

ISBN4-13-041018-0　　41183

はしがき

経済学は、市場経済なり資本なりの論理が人間や社会や歴史の、場合によっては自然さえもの、構造と運動を規定する基本的要因の一つであるとみる人間社会についての一つの見方、切り取り方を、体系的に示そうとする学問であるといってよい。もちろんそれは、このような経済的論理が人間や社会や歴史を一元的に規定するとみるわけではない。とりわけ現代では、市場経済なり資本なり以外のいわば経済外的諸要因の作用が増大しつつあり、人間も社会も歴史もそのような諸要因によって動かされる度合いが以前よりも大きくなっているので、なおさらである。しかし、それでは経済的要因の規制力はまったく働かなくなってしまっているのかというと、そんなことはない。現代でも資本や商品経済的関係が人間や世界や歴史を動かす重要な要因の一つであることには変わりはないのである。重要な要因はそれだけではないということの程度が大きくなり、現実の構造と運動の仕組みがより複雑になっただけである。そして、経済学としては、そのような現実をあくまで経済的要因が動かしているものとして、あるいは現実のそのような側面をとくに取り出して、説明するのである。そのような見方なり説明なりが正しいかどうか、有用であるかどうかは、いまではもはや経済的要因が動かしているとはいえないとみる観点からの別の説明とつき合わせて、どちらが現実説明力を持っているかを対比することによって判断されるしかないであろうが、仮りに経済学の射程や有用性が多少とも減少しつつあるとしても、経済学としてはそれ以外の説明のしようはないのである。経済学は別にすべてを説明しうる万能の学問でなければならないわけではないし、そのようなことはありうることでもないであろう。

ところで、経済学はこのような錯綜した現実にたいして次のようにアプローチする。すなわち、まず資本が様々な市場機構を通して人間と自然との物質代謝を一元的に処理している社会を純粋に構成する。このいわゆる純粋資本主義社会の構造と運動を解明するのがいわゆる原理論である。次いで、種々の経済外的要因との対抗関係を通して資本主義社会の様相が変化、発展するという問題が考察される。ここでは経済外的要因も人間や世界や歴史を動かすものとしての一定の役割を与えられる。しかしそれは、あくまで経済的要因の規制力を偏倚させ、変容させるものとして位置づけられるのである。そして、このように経済的要因が一元的に支配している社会と、必ずしも一元的には支配していない社会とを基準とし、それにさらに特殊的、個別的な諸要因を投入することによって、経済的要因を基本動因としながら、多元的動因によって動いている社会として、現実をいわば立体的に再構成するのが経済学のいわゆる現状分析である。

現実にたいするこのようなアプローチの仕方は、発生期から現代にいたる資本主義の発展の仕方にたいする次のような見方と密接な関連を持っている。すなわち、資本主義は人類史のある時期に地球上の一部の地域に発生し、その外部世界にたいして商品経済的な破壊力、分解力を及ぼしながら、必ずしもそれを完全には分解しきれないまま、その商品経済外的関係をいわば包摂して、一社会として成立し、発展してきたという見方である。そして原理論は、この資本ないし商品経済のその外部世界にたいする分解力をそれ自体として構造化して示したものということができる。その場合、この分解力は同時に外部世界にぶつかって反作用を受け、そのことによって自らの構造を変化させるのであるから、この構造の原理は、そのような外的要因の反作用を受けとめて発展、進化することが説けるような構造の原理として構成されていることが望ましいといえよう。

原理論の展開におけるいわゆる分化・発生論的方法は、このような要請にこたえる意味を持つものといってよい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

分化・発生論的方法とは、産業資本の増殖と蓄積のための市場機構ないし市場組織を、利潤率増進行動を動力にして産業資本の内的な契機が分化、独立したものとして展開し、そのことによってそれら諸機構、諸組織の産業資本にたいする位置ないし役割を有機的、立体的に明らかにしようとする方法のことをいう。『資本論』では第三巻第四篇の商業資本論でこの分化・発生論的方法を採用しているようにみうるところがあるが、第五篇の利子生み資本・信用制度論ではこれと異質の方法をとっている。これにたいして宇野弘蔵は、信用・貨幣市場機構を分化・発生論的に展開するという画期的な方法を提起した。本書での信用機構論の原理的考察はこの宇野の方法を継承するものである。そのことの具体的な内容は本書によってみていただきたいが、本書はそのほかに、信用論を信用創造論の原理論として整備、再構成することを企図するものであり、この二つが本書の最も強調したい論点である。

本書の各章はいろいろな機会に書いた旧稿をもとにしているが、その構成は次の通りである。まず第一章では『資本論』の利子論を概観する。これは鈴木鴻一郎編『マルクス経済学講義』（青林書院新社、一九七二年）の第一編第二章「『資本論』の解説」として書いた拙稿の第三巻第四篇の部分の一部と第五篇の部分とからとった。第二章はこの『資本論』の利子論にたいする宇野弘蔵の問題提起の意義と宇野の信用論の基本的な内容を概観する。これは桜井・山口・侘美・伊藤編『経済学Ⅰ』（有斐閣、一九八〇年）第Ⅲ部「マルクス経済学の発展」の第三章「利子論」として書いたものである。つづく第三章のもとの論文は「商業信用と銀行信用」（鈴木鴻一郎編『信用論研究』法政大学出版局、一九六一年、所収）である。これは手形や銀行券が貨幣にまがう流通力を持ちうるのはいかにしてであるかという問題を軸にしながら信用創造の具体的メカニズムを考察したもので、かなり以前の論稿ではあるが、なお検討を要する問題をいくつか提起していると考え、収録した。ただ、注のうち旧稿発表当時のわが国における信用論研究に論及した部分は全部削除した。第四章は現在絶版の小野・志村・玉野井・春田・山口共著『現代金融の

理論』（時潮社、一九七一年）第Ⅰ篇第一章の再録である。これは前章の成果をふまえて、さらに積極的に信用機構論の体系的整備、拡充を試みたものであり、そのうえ、資本結合と資本市場を信用機構の限界を打開する機構として原理的に位置づける新たな試みを提起している。第五章では前二章で部分的に概観した信用と恐慌ないし景気循環との関連をさらに立ち入って考察する。もとになっている論稿は、鈴木鴻一郎編著『マルクス経済学』（日本評論社、一九七四年）所収の「産業循環」と大内・鎌倉編『経済原論』（有斐閣、一九七六年）第7章の2「産業循環と恐慌」である。最後の補章のもとの論文は「鋳貨論の問題と貨幣論の方法」（電気通信大学『学報・人文社会篇』第一五号）である。これもかなり以前のものであるが、象徴貨幣論が近年装いを新たにして盛んに論議されているので、この問題についてのマルクス経済学の側の考え方をこのさい確認しておきたいということと、貨幣の象徴化の問題は金融機構の理論にとっても重要な問題であるということから、ここに収録して読者の検討に供することにした。ただ、ここでも注をいくつか削除した。

旧稿は全面的に点検して、明らかなミスの訂正や文章上の補整、削除、追加などをほどこした。また、表題や体裁を変更したところもかなりあるが、基本的な内容はほぼもとのままである。そのため執筆の時期が離れている論稿の間に若干の不整合がある場合があるが、その補整は困難で、そのままにせざるをえなかった。そのほか、旧稿にたいして多数の方々からいただいた批評の検討を果していないことがもう一つの心残りな点であるが、この債務についてはできるだけ早い時期に支払いにとりかからなければならないと考えている。また、先に述べた宇野の分化・発生論的方法は、市場機構論の全面について継承、発展させなければならないものと考えられるが、本書では、たとえば銀行資本の成立の問題にしても、資本結合の形成の問題にしても、この観点からの展開は未着手のままである。この課題もできるだけ早い機会に果したいと考えている。さらに欲をいえば、商業資本機構が形成されてい

ることを前提した信用機構論の展開、資本市場が形成されていることを前提した景気循環論の展開なども、早急に試みてみたい課題である。

私事にわたって恐縮であるが、本書の第三章と補章のもとの論文は、私の大学院時代の病中・病後の時期に私の叔父北野清の家の一室で、越前の海と海岸を眺めながら書いたものである。そのときの手厚いお世話にたいする感謝の気持として、本書をこの叔父夫妻に献じたい。

なお、最後になったが、本書の出版にあたって東京大学出版会の大瀬令子さんに大変お世話になった。心から感謝の意を表する。

一九八三年十二月

山口重克

凡　例

一、マルクスの著作については、次の各版によって引用の個所を示す。ただし、訳文はそれぞれ必ずしも左記の邦訳書どおりではない。

(1) K. Marx, *Das Kapital*, Band I, II, III, in: *Marx-Engels Werke*, Band 23, 24, 25, Dietz Verlag, 1962, 63, 64. 向坂逸郎訳『資本論』岩波文庫(一)～(九)、一九六九～七〇年。引用に際しては（K., I, S. 122. 岩(一)一九二頁）のように略記する。

(2) K. Marx, *Das Kapital*, Erster Band. Buch 1, Verlag von Otto Meissner, 1867. 宮川実訳『資本論・初版第一章および価値形態』一九四八年、青木書店。引用に際しては（K. I. E. B., S. 22. 『初版』宮川訳四五頁）のように略記する。

(3) K. Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, Erstes Heft, Dietz Verlag, 1951. 武田隆夫・遠藤湘吉・加藤俊彦・大内力訳『経済学批判』岩波文庫、一九五六年。引用に際しては（Kr., S. 67. 岩八一頁）のように略記する。

(4) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, Rohentwurf 1857-1858*, Dietz Verlag, 1953. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』I～V、大月書店、一九五八～六五年。引用に際しては（Gr., S. 123. 『要』(一)一二九頁）のように略記する。

二、引用文中の／はパラグラフの切れ目を、〔　〕は引用者の挿入を示す。

大内秀明 桜井毅 山口重克 編	資本論研究入門	二八〇〇円
宇野弘蔵	資本論に学ぶ	九〇〇円
大内力	信用と銀行資本	三六〇〇円
日高普	銀行資本の理論	二〇〇〇円
日高普	資本の流通過程	二四〇〇円
伊藤誠 桜井毅 山口重克 編訳	論争・転形問題	二四〇〇円
佐伯尚美他編	マルクス経済学の現代的課題	一八〇〇円

ここに表示された定価は，物価の変動などにより
変更されることがありますので御諒承ください．

目次

はしがき
凡例
第一章　『資本論』の利子論
はじめに……一
第一節　利子生み資本……五
第二節　信用制度……一〇
第二章　マルクス信用理論の体系化
——宇野理論の展開——
はじめに……一九
第一節　宇野弘蔵の問題提起……二三
一　利子論の端緒の問題……二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　資本物神論の問題……二五
三　利子率の原理的規定……二六
四　資本主義的生産における貨幣貸付の役割……二七
第二節　産業資本と信用制度……二〇
一　流通上の諸費用の節約……二〇
二　利潤論の補足……二一
三　遊休貨幣資本……二二
第三節　信用制度の基本構造……二六
一　商業信用……二六
二　銀行信用……二九
三　中央銀行……四二
四　信用創造……四四
第三章　信用機構と銀行券流通
はじめに……四九
第一節　商業信用……五一
一　商業信用の要請と展開の条件……五一

二　商業信用と信用創造……六〇
三　商業信用の限界……六五
第二節　銀行信用……六七
一　銀行による信用代位……六七
二　銀行券の流通性の根拠……七二
三　信用と景気循環……八七

第四章　金融の原理的機構

はじめに……一〇三
第一節　商業信用……一〇四
一　商業信用の展開……一〇四
二　商業信用の意義と限界……一一〇
第二節　銀行信用……一一四
一　銀行信用の展開……一一四
二　銀行信用の構造……一二一
三　銀行間取引……一二七
四　銀行信用の意義……一三一

第三節　資本市場……一三九

第五章　恐慌と金融機構

はじめに……一四七
第一節　『資本論』の恐慌論……一四九
一　各巻での恐慌への論及……一四九
二　『資本論』の問題点……一五三
第二節　宇野理論の恐慌論……一五七
一　宇野恐慌論の基本構造……一五七
二　蓄積論と競争論……一六三
三　労賃騰貴と物価騰貴……一六七
四　利潤率低下と利子率騰貴……一七二
第三節　総括――産業循環と信用……一七七

補　章　鋳貨と貨幣の象徴化

はじめに……一八五

第一節　マルクス鋳貨論の方法……一八七
一　問題の所在……一八七
二　磨滅と象徴化……一九三
三　媒介性と象徴性……二〇一
第二節　価値尺度と流通手段……二〇五
一　『資本論』の価値尺度論……二〇五
二　媒介と購買……二一三
三　象徴の購買力の根拠……二二〇
四　紙幣流通法則をめぐる若干の問題……二二六
第三節　流通手段と蓄蔵貨幣……二二四
一　問題の所在……二二四
二　貯水池としての蓄蔵貨幣……二二七
三　致富欲の対象としての蓄蔵貨幣……二四四
第四節　総括——貨幣の象徴化と流通論の方法……二四九

第一章　『資本論』の利子論

はじめに

『資本論』の利子論ないし信用論は『資本論』第三巻第五篇「利子と企業者利得とへの利潤の分裂　利子生み資本」において論じられている。

『資本論』の篇別構成の仕方からすると、第三巻「資本主義的生産の総過程」は、第一巻「資本の生産過程」と第二巻「資本の流通過程」のいわば統一を考察対象とするようにみえるかも知れないが、マルクスによればそうではない。この点をマルクスは、第三巻の冒頭でつぎのように説明している。すなわち、資本の生産過程と流通過程の統一は社会的再生産過程としてすでに第二巻第三篇で考察されており、したがってこの第三巻でなされなければならないことは、この統一について一般的な反省を試みることではない、全体としてみた資本の運動過程から出てくる具体的な諸形態を発見し、叙述することである、と。そして実際の内容も、この第三巻では、まず前半の三篇で産業資本が個別資本として相互に利潤率をめぐる競争を展開しながら社会的生産を編成する独自な仕方が一般的に考察され、ついで後半で産業資本と相対して競争を展開しつつその運動を媒介する商業資本、利子生み資本、土

地所有などの諸機構の役割の考察が行なわれているのである。こうして資本の生産過程と流通過程の統一としてすでに第二巻末で考察された社会的再生産過程の均衡編成は、このような諸資本の競争とその諸機構とによって実現されるものであるということが明らかにされ、第一巻、第二巻で考察された剰余価値は、現実には利潤、商業利潤、利子、地代という具体的分化諸形態を展開することが明らかにされることになっているわけである。

利子論ないし信用論は右のような第三巻の後半の第五篇において論じられているわけであるが、それに先行する第四篇「商品資本と貨幣資本との商品取引資本と貨幣取引資本とへの転化（商人資本）」の第一九章「貨幣取引資本」において、現実には銀行資本の業務の一つとして行なわれる貨幣取扱業務が、商業資本の亜種としての貨幣取引資本の業務として、信用論から分離して独立に論じられているので、まずそれを紹介しておくことにしよう。

産業資本およびその運動の一部を代位する商品取引資本としての商業資本は、商品の売買を行なうと同時に、それにともなう貨幣流通の技術的操作を行なわなければならない。流通手段、支払手段としての貨幣の支払、収納、それにともなう差額計算、決済、簿記、および蓄蔵貨幣の保管などがそれであるが、マルクスは、このような産業資本と商業資本の流通過程で貨幣が行なう純粋に技術的な運動だけを自分の特有な操作として行なう資本のことを貨幣取引資本と規定するのであり、そのかぎりでこの資本も流通過程にある産業資本の一部分が独立したものであるというわけである。このような資本の機能は具体的には信用業と密接に結びついて現われるのであるが、マルクスはここではこの貨幣取引業（というよりも取扱業）を信用制度から分離されたものとして純粋な形態で考察している。

このような貨幣取引資本は、商業資本の亜種といっても、商品取引資本のように商品流通を媒介するものではない。これが媒介するのは貨幣流通の技術的操作だけであり、商品流通およびその一契機としての貨幣流通そのもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com